お届け料でケニアの道を整備できました！

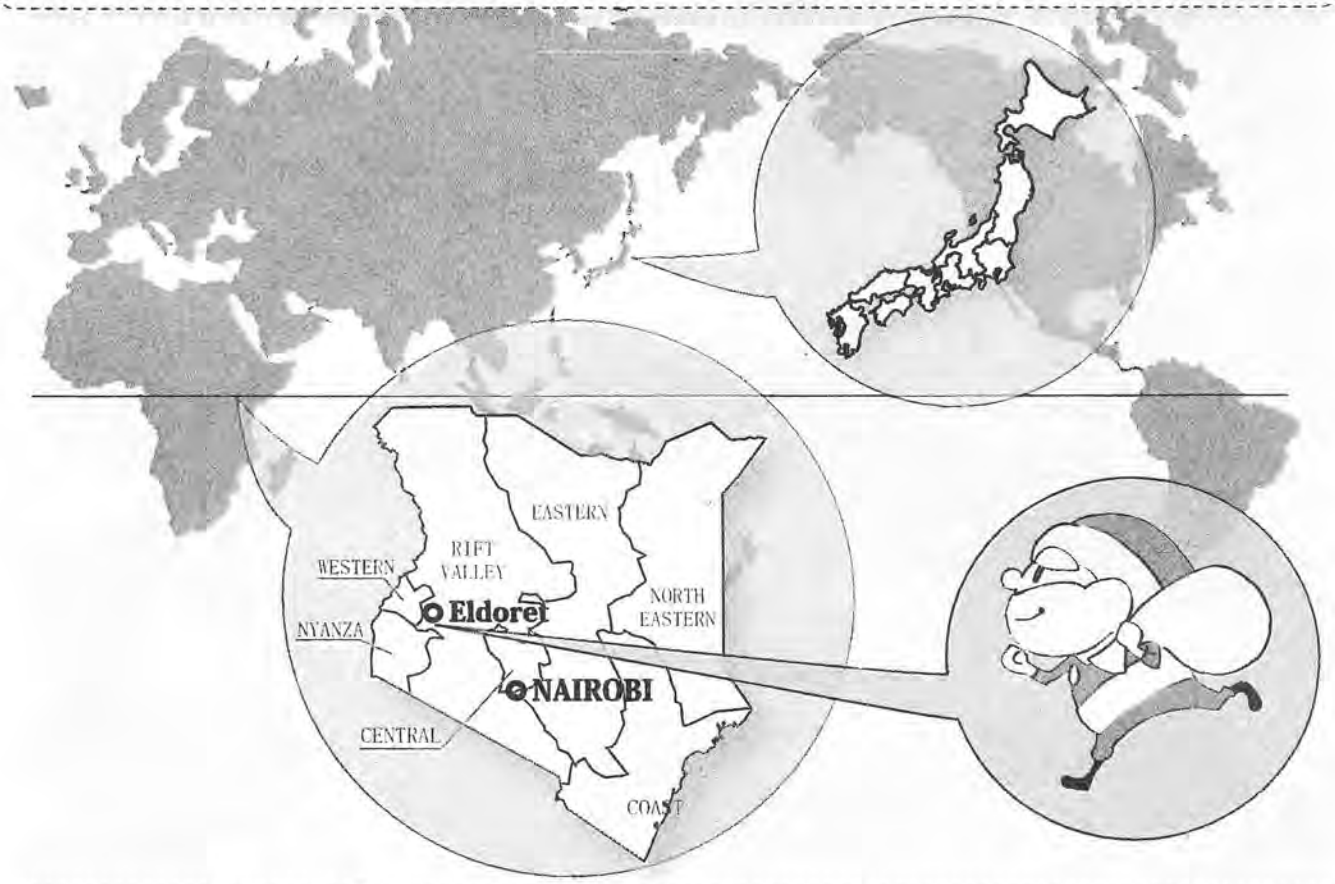
ケニアの現状説明

ケニアは東アフリカにおける代表的な国家のひとつで、赤道直下に位置しています。首都はナイロビ。国土面積は586,600平方キロメートル。日本の約1.5倍です。赤道直下の国と聞くと、とても暑いイメージですが、ナイロビなどは標高が高いため平均気温は18度前後と過ごしやすく、雨期になると長袖が必要なくらいです。気候は、大きく雨季と乾季に分かれており、3～5月が大雨期、11～12月が小雨期となっています。雨期は日本の梅雨のように1日中雨が降っているのではなく、激しい雨が短時間に集中して降ります。

ケニアには、42の部族が暮らしており、60以上の言語や方言があると言われています。国民のほとんどは2つ以上の部族語に加えて、スワヒリ語と英語を話すことができます。英語が公用語なのは、イギリスの植民地だったためです。また、ケニアには伝統的な文化と様々な民族の影響を受けて誕生した近代的な文化があります。首都のナイロビは東アフリカで最大規模のＩＴ設備をもち、ビジネスの中心となっています。

その半面、ナイロビから車で数時間ほど行った地域では、伝統的な習慣に従い、夜はライオンに襲われないように槍を持ち警戒をするような生活を送っています。

今年度、海外支援で訪れた村はナイロビから西へ約300km離れたエルドレット県のカボンゴ村です。この地域に住む人々の多くは、約20年前に1エーカーの土地を購入し、他の地域から移り住んで来て農業を行っている小規模農民で、様々な民族が入り混じって住んでいます。2007年12月に行われた大統領選挙後の暴動で、一部の民族が襲撃を受け、国内避難民が多く出た地域です。この暴動の後、日本政府とIOM（国際移住機関）の支援を受けた平和構築のためのプロジェクト活動を通して、平和構築活動や収入向上活動のために、農民自らが組織した「カゾキグループ」と共に道直しの活動を行いました。



NPO法人 道普請人（みちぶしんびと）さんについて

今年度の協力団体である道普請人さん（以下、敬称略）は、「開発途上国の問題は、現地に適したやり方で、そこに住む人々自身で解決していく」ことの実現を目指しています。これまでケニア、パプアニューギニア、フィリピン、ウガンダ、タンザニア、コンゴ共和国、カメルーン、ベトナム、ザンビアで活動を展開しています。

道普請人が活動を展開する国を含め、開発途上国の多くは農業国でありながら、農村に通じる道のほとんどは未舗装の状態です。この未舗装の道は、雨の少ない乾季には道路面が硬く、車の通行が可能です。しかし、雨期になると道に水が溜まって泥田状態になったり、深い轍ができたりして通行が困難になります。農村部の道は「１本道」状態になっており、代替の道が存在しないため、わずか数メートル通れなくなるだけで村全体の死活問題になりかねません。病院や学校に行くことができなくなります。せっかく収穫した農作物を市場に運ぶことができずに腐らせてしまい、現金収入が得られなくなります。このことが開発途上国における農業技術が発達しない大きな原因であり、ひいては貧困の原因となっています。

この問題を解決するために道普請人は、簡単な方法で人々を幸せにするにはどうしたらいいのかを考えた末、人力施工が主体となり、材料を低予算で現地調達することが可能な「土のう」を用いた道路整備手法を開発しました（道を１メートル改修するのに、アスファルトだと5000円以上かかりますが、「土のう」なら平均して500円で直すことができます）。この手法を住民に伝えることで、住民自らで道の整備や継続した維持管理が可能となり、雨期でも道の通行性の確保が可能になりました。１年を通して子どもでも安心して通行ができるようになることで、直した道の先に幼稚園ができた村もあります。道直しの技術と同時に、いつ・どの作物がどの品質で高い値段で売れるのかといった、市場の動向を踏まえた有利な商業型農業を実践する能力を身につけることで、活発な経済活動が可能となりより多くの現金収入が得られるようになります。その結果、子どもの教育費や薬代を負担することができます。

また、住民にとって簡単な技術や工夫を伝え、その生活改善を目に見える形で貢献することで、人々の自信とやる気を引き出し、道以外の身の周りの問題に対しても自分たちで解決していこうという姿勢を引き出します。この様な住民の意識変化は暮らしを豊かにし、貧困削減に繋がります。今年度、海外支援で訪れたケニアでは、住民自らが土のうを用いた橋の修復や、新たにため池を造り、雨期を利用した魚の養殖を始めようとしています。

自分たちで生活環境を改善しようとする大人のたちの姿を見て、子どもたちはその考え方や行動をすることは当たり前のことだと感じるようになるかもしれません。もしかしたら、今後土のうを用いた道の改修作業や、それを通して新たに可能となる農業が仕事の選択肢として新たに増えるかもしれません。道普請人の活動は大人たちに技術を伝え意識変化を促すだけでなく、子どもたちの未来にとっても多くの可能性を秘めています。